

お祭りでよく見かける神輿というものがあります。子どものころ、神社のお祭りの時などに、神輿が来ると聞いて、走って見に行った記憶があります。学生時代京都で暮らしたので、祇園祭の山鉦（やまほこ）とよばれる美しい山車（だし）を見たり、大阪に住んだときには、岸和田のだんじり祭りのだんじりなどもよくニュースになって見ましたが、それはすべてが神輿なのです。

何で神輿を担いで、町内を回るのか。祇園祭の山車（だし）も京の町をなぜ引き回しするのか。それは、ざっくりと言えば、神輿にはご神体、神さまや神霊が乗っているからです。ふだんは神社にいますが、祭りの時には神輿に乗られ、町内人々に対して偉大な力を振りまき、災厄や汚れを清める働きをする。それで町内に神輿が来ることはとても有難いことなのです。1年に一回、神さまの方からやって来てくれる、それが神輿です。

旧約聖書を読むと、まさに日本の神輿にあたるようなものが3000年以上も前にあったことが記されています。今日読んだ聖書箇所に出てくる「神の箱」がそれです。ここでは神の箱と呼ばれていますが、もともと「契約の箱」と呼ばれている箱で、まさに神輿と同じで箱に棒状のものがついていて、何人かで担いで運ぶようにできていました。いったい、その箱の中には何が入っていたと思いますか。石の板石板に刻まれた神の言葉が入っていたのです。その言葉は十戒と言って神さまがモーセに語った十の言葉、それが二つの石板に彫り込まれ、箱の中に入っていた。神の箱がいつできたのか、正確にはわからないのですが、モーセの時代から神の箱はあった、という人もいます。日本のおみこしと似ているけれど違う点は、日本の神輿には神さまが乗るのですが、契約の箱は神さまが入っているわけではない。神の言葉が入っていたのです。聖書の神さまはわたしたちの目には見えない。手でも触れない。ある形をとるものでもない。神は言葉で、わたしたちに呼びかける。言葉で導きを示し、言葉でわたしたちを支える。言葉は、神の存在をわたしたちに示すのです。だから、神の箱には神の言葉が入っていたのです。

神の箱は日本の神輿のように町内を練り歩くわけではないけれど、この箱を担いで戦争の時など、戦場まで担いでいく、というようなことがあったようです。

確かに箱は物にすぎない。しかしその箱に入っている神の言葉は神が和達したちに語りかけ、生きて働いておられる、ということの象徴シンボルだったのです。また契約の箱と呼ばれたように、神とイスラエルの間の契約、どんな時でもあなたたちを導く、あなたたちの神でいつづける、という約束の箱であったのです。だからこそ、イスラエルの人々はこの契約の箱を戦場にまで運び込んだのでしょ

う。その大切な契約の箱が戦争で負けたときに相手の国に奪われてしまう、ということも起こっていきました。契約の箱がなくなり、意識からも遠のいていった時期もありました。けれど、やがていろいろなことを経て、契約の箱はイスラエルに戻ってきました。今日はその神の箱をめぐる話です。

ダビデは今日読んだ5章のところで、イスラエル全体の王となりました。これまで二つに分かれていた国が、一つになり、王さまとなりました。

イスラエルの全体の王になったダビデが最初にしたことはそれまでヘブロンというところに住んでいたのですが、イスラエルの都をエルサレムにした、ということでした。ここに要害を作り、城壁を作り、王宮を作り、堅牢な都を作りました。都が整備される中、ダビデがしたことは、多くの選りすぐりの兵士を集め、あの神の箱が置いてある町から、それを担いできて、エルサレムへ運び入れる、ということをしました。三万人もの兵士を連れて行った、というのですから、それも様々な音楽を打ち鳴らしながらの行列で、浅草の三社祭の人並み以上の大変な人垣だったのではないかと、思います。ところが神の箱を運ぶ最中にウザという人物が神の箱を押したことで死んでしまう事件が起きました。ダビデはそのことで神さまに対して怒りを覚えました。どうして神の運んでいる最中のことでウザが死なねばならないのか、神さまに対して怒りました。それでエルサレムに運び入れるのをやめて、ガテ人の町に移したのです。ところがそのガテの町の人々が神の箱を迎え入れたことで、町の人々が神さまからの祝福を受けたのを聞き知って、ダビデは自分の過ちを自覚したのです。ダビデという人は、この後も様々な過ちや判断のまちがいをおかしていくのですが、その過ちを認めたら、すぐにあらためていく、という素直さ、率直さがありました。

もともとダビデが三万人もの兵士を引き連れて、神の箱をエルサレムに運び入れる、と考えて判断したのには、理由がありました。神の箱を運び入れ、それを町の中心に据えるということは、神の言葉によってわたしたちは導かれ、活かされ、恵みを受けていくのだ、ということのしるしでした。この町は、こ

の都は、この国はこの神の言葉によってこそ導かれ、神の言葉によって歩いていくのだ、という信仰の宣言のようなものでした。神の箱をみんなで運び入れ、エルサレムの中心にそれを据える、それはこの国の人々は、神さまとの関係を最も大事にし、自分の生活の中心に神の言葉を置く、ということだったのです。しかしダビデは神のはこの運び入れを、一旦中止してしまいました。もちろん自分なりの理由はある。しかし神の言葉の前で自分の判断を優先していたことを悔いたのではないでしょう。自分たちがほんとうに大事に思っているもの、大事だと感じていること、それを形にして表す。それが今ここでは神の箱をエルサレムに運び入れる、ということだったのです。

神の箱を運び入れるとき、ダビデは肥えた雄牛を屠り、神への献げものとしてささげ、人々は喜びの叫びをあげ、音楽を奏で、神の箱を迎え入れました。ダビデは喜びのうちに踊ったのです。飛び跳ねるように踊り続けたのです。それを王宮の窓辺から見ていた妻ミカルは心のうちにさげすんだ、ダビデを軽蔑した、というのです。

ダビデをはじめ人々の喜びは大変なもので、神に献げものして、神を礼拝し、兵士はもちろん、そこに集まってきたイスラエルの人々全員に、パンやお菓子を与えて喜びを分かち合いました。ダビデが家に戻ってきたときです。妻ミカルは「今日のイスラエル王はご立派でした。家来や奴隷たちの前で裸同然の格好で踊られたのですから。中身のない、空っぽの男が人前で裸で踊るようでした。」

ダビデの妻ミカルはサウル王の娘でした。王家に生まれ育ち、はしたないこと、恥ずかしいことなど何一つしないで、育ってきたのかもしれませんが。ミカルからすれば、ダビデの喜びようや、踊りぶりや、騒ぎようは気違いじみて見えたのでしょ。妻から見て夫の姿は見つともない、情けないものだったのでしょ。しかし、ダビデにとって見つともいいか悪いか、というようなことはまるで問題ではなかった。自分は王さまになった。イスラエル全土の王さまになった。それはわかりやすく言えば、この国で自分より偉い人はいないのです。古代の国家では王さまは神さま、という国はいくらでもありました。ダビデの前の王サウルも結果的にはそうなってしまったのです。だが、ダビデは新しい都エルサレムを築いて、この都の、この国の最も大事なものの、王の言葉よりも、誰の言葉よりも大事なものの、それは神の言葉だ、ということ態度で表したのです。王と言えども神の言葉の前ではひれ伏して、一人の人間として、それに従うものとなる、ということダビデは体で表現した。もちろんその態度の表し方はいろいろあっていいでしょう。厳かに、恭しく迎え入れる態度もあって

いい。いろんな態度があるでしょう。アメリカの黒人教会の歌と踊りに溢れた礼拝もあれば、日本の国の教会の礼拝のような礼拝もあるように。ただダビデは人々と一緒になって神の箱を大歓迎したのです。ミカルはそのダビデを冷静に、容赦なく批判した。それはおそらく彼女が神の言葉とそうやっては向き合っ
てこなかった、ということなのです。神の言葉と言っても、自分が気にいれ
ば聞く、気が向けば聞く、時間と暇があれば聞く、自分に損にならないければ聞
く、自分が主。だからたかが神の箱を運び入れるぐらいのことでこんな大騒ぎ、
バカ騒ぎをする連中の気が知れない。ミカルはそう思ったのでしょうか。ダビデ
は妻に、「自分の国の指導者として選び、導いてくださる神の前で、わたしは踊
った。わたしはこれからも神の言葉の前で低くされていきたい、低いものであ
り続けたい。」

神の箱を運び入れ、その箱の前で喜び踊ったダビデの姿を、わたしたちも心
にしっかり焼きつけていきたい。そしてわたしたちも神との関係を自分として
態度で表していきたいと思うのです。